子ども・親
教育関係者に聞く

# 暮らしにおける子どもの育ちに関する意識・実態調査 2026

## ―AIと感性―

SEKISUI HOUSE

昨日までの常識が、明日にはもう変わっているかもしれない。
便利な情報がすぐ手に入る一方で、何を信じ、何を選び、どう生きていったらいいのか?
積水ハウスは、子どもたちの幸せについて考えてきました。
「わが家」を世界一幸せな場所にする。
このグローバルビジョンを実現するための答えのひとつが、
子どもの「感性」を育むことだと信じています。

「今日はこっちかも」とか「なんか気になる」とか「私はこれが好き」とか。
みんなと同じじゃなくていい。自分の心が動いたものに気づき、自然と体が動いてしまう不思議。
それは、自分で世界の見方を広げ、何が幸せかに気づかせてくれる「感性」です。

日々の暮らしの中で、一人ひとりの中にある「感性」を大切にしていきたい。
特別なことじゃなくていい。できることは、きっとある。

# 子どもたちが幸せになるために できることを、もっと。

## 調査背景とポイント

積水ハウス株式会社は、“「わが家」を世界一幸せな場所にする”というグローバルビジョンのもと、子育てを応援する「キッズ・ファースト企業」として、子どもの育ちを支える暮らしや関わりを考えるため、本調査を実施しました。

子ども・親・教育関係者の回答からは、親の認識以上に子どもの生成AI利用が進み、親の回答では未就学児でも1割超が週1日以上、一人で利用していることが分かりました。一方、親の約5割、教育関係者の約6割が「自分で考える前にAIに答えを求めること」を懸念しています。また、親子で過ごす時間への満足度は、親よりも子どもの方が高く、日々の関わりに対する肯定的な実感も見えてきました。

こうした結果を踏まえ、親・教育関係者のそれぞれ約8割が大切にしたいと捉える「感性」にも着目。専門家の解説とともに、日々の暮らしで子どもの育ちを支えるヒントを探ります。

# 目次

CONTENTS


プロジェクトステートメント 01
CONTENT（目次と調査概要） 02

第1章:社会背景・2026年注目のテーマ 03
1.子どもの生成AIの利用実態 04
2.生成AIの利用・普及に対する期待と不安 05
3.生成AIが親子コミュニケーションに与える影響 08

第2章:暮らしにおける子どもの育ちに関する意識と実態 10
1.子育てで今、大切にされていること 11
2.家庭における親子の日常 12
3.教育関係者に聞く、子どもの育ちと教育現場の今 16

第3章:子どもの感性を支える、日々の暮らし 18
1.子ども一人一人の感じ方や考えを大切にする「感性」 19
2.親子の関わりと、子どもの日常を支える住まい 22
有識者インタビュー（京都大学 高橋雄介准教授） 24
子どもの感性をはぐくむための3つのアクション 25
積水ハウスの「キッズ・ファースト」について 26


調査概要

## 暮らしにおける子どもの育ちに関する意識・実態調査2026　−AIと感性−

□ 実施時期: 2026年9月15日（火）～9月24日（木）
□ 調査方法：インターネット調査
□ 調査対象 :全国の小学3年生以下の子どもを持つ親1,600人、小学4年～高校3年の子どもを持つ親と子ども2,400組※、教育関係者:500人　計4,500人

※小学4年～高校3年の親と子どもについては、同一家庭の親と子の双方から回答していただきました。親には、自身の子どもについて回答していただいています。
※本調査の小学4年～高校3年の子どもの回答は、親が設問内容を子どもに説明した上で、子どもの回答を親が代行して入力しています。
※本調査に記載の割合の数値は、小数第2 位または第3 位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

●調査委託先:マクロミル

# 第1章

## 社会背景・2026年注目のテーマ

## 生成AIが暮らしや家庭にも浸透する今、子育ての環境はどう変化しているのか?

子どもが日々を過ごす暮らしや子育てを取り巻く環境は、
大きく変化しています。中でも、生成AIの普及は、
情報の調べ方や学び方、人とのやりとりにも関わる、身近な変化の一つです。

「暮らしにおける子どもの育ち」を考える本レポートでは、まず、
その一つとして、家庭での生成AIの利用と、それに対する意識に着目します。

生成AIは、子どもの学びや好奇心を広げる可能性が期待される一方で、
自分で考える機会や親子のコミュニケーションへの影響を
懸念する声もあります。期待と不安の両面を伴うこうした環境の変化は、
子どもが感じ、考えることの意味を、改めて見つめ直すきっかけにもなります。

子ども・親・教育関係者の回答から、家庭での利用実態と、
それぞれが抱く期待や不安を捉え、
子どもの日常にどのような変化が生じ得るのかを探ります。

# 1.子どもの生成AIの利用実態

**生成AIは、仕事や学習だけでなく、家庭など日々の暮らしでも使われるようになっています。**
**子どもにとっても身近な存在になりつつある生成AIは、家庭でどの程度利用されているのでしょうか。**
**まず、子どもと親それぞれの回答から、家庭における生成AI※の利用実態を見ていきます。**

※本調査では、文章、画像、音声などを自動的に作成したり、質問に答えたりする生成AI（例:ChatGPT、Gemini、Microsoft Copilot など）について回答いただきました

## 生成AI、未就学児であっても1割以上が「利用」と親が認識
## 小学校高学年では約3人に1人の子どもが「1人で利用」と回答
## 子どもの利用頻度は親の認識よりも高い実態

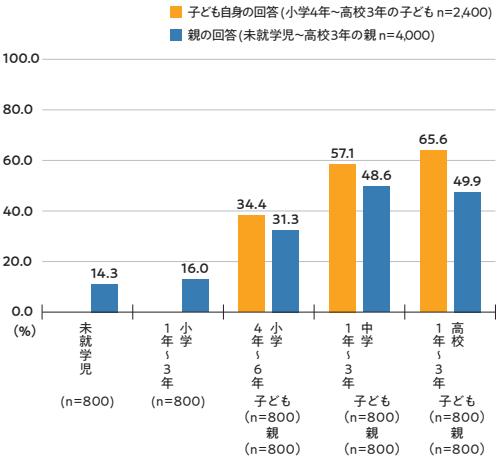
子どもと親を対象に家庭での子どもの生成AIの利用実態について聞きました。

まず、子どもに家庭での自身の生成AI利用を聞くと、「週1日以上」1人で生成AIを利用すると答えたのは、小学4年～6年で34.4%と約3人に1人、中学生では57.1%、高校生では65.6%となりました。

次に家庭で子どもが生成AIを利用する頻度を親に聞いたところ、「週1日以上」利用する割合は、未就学児が14.3%、小学1年～3年で16.0%と1割以上が利用し、小学4年～6年になると31.3%に増え、中高生では約半数が利用していると認識しています。親の認識以上に、子どもの生成AI利用は多いことが分かりました［図1］。未就学児でも、親の14.3%が週1日以上利用しているとの回答があるなど、生成AIの利用が子どもの日常にも広がる一方、家庭での生成AI利用状況について、親子間で認識に差がある可能性がうかがえます。

**［図1］家庭での生成AI利用（週1日以上利用）**

子ども:Q. あなた自身は家庭で生成AIを1人でどのくらい利用していますか?
対象:小学4年～高校3年の子ども（n=2,400）
親: Q. あなたのご家庭で、子どもは生成AIをどのぐらい利用していますか?
対象:未就学児～高校3年の親（n=4,000）




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 2.生成AIの利用・普及に対する期待と不安

## 生成AIへの期待
## 子どもは身近な「便利さ」「情報」を求め、親は「深い学び」、教育関係者は「新しい視点」に期待

子どもによる生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、期待していることを子ども、親、教育関係者それぞれに聞きました。

子どもは「知りたい情報や必要な情報を、短時間で得やすくなること」が1位でしたが、親は「興味のあることを、より深く学んだり調べたりしやすくなること」、教育関係者は「自分だけでは思いつかなかった考え方や、ものの見方に触れられること」が1位でした[図2]。子どもは情報を得ることに、親や教育関係者は深い学びや視点が広がることに、より期待を寄せている様子がうかがえます。

**[図2]生成AIに対する期待TOP5**

子ども・親・教育関係者:Q子どもの生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、期待していることは?(複数回答)

### 子ども

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **知りたい情報や必要な情報を、短時間で得やすくなること** | 41.6 |
| 2位 | **興味のあることを、より深く学んだり調べたりしやすくなること** | 34.8 |
| 3位 | **勉強をしたり、自分の答えを確認したりしやすくなること** | 33.2 |
| 4位 | 分からないことを、自分に合った方法や言葉で説明してもらえること | 33.1 |
| 5位 | 自分だけでは思いつかなかった考え方や、ものの見方に触れられること | 32.5 |

小学4年～高校3年の子ども(n=2,400)　(%)

### 親

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **興味のあることを、より深く学んだり調べたりしやすくなること** | 37.4 |
| 2位 | **自分だけでは思いつかなかった考え方や、ものの見方に触れられること** | 35.0 |
| 3位 | **知りたい情報や必要な情報を、短時間で得やすくなること** | 34.6 |
| 4位 | 分からないことを、自分に合った方法や言葉で説明してもらえること | 29.4 |
| 5位 | 生成AIを使いこなす知識や技術が身につき、将来の選択肢が広がること | 29.3 |

未就学児～高校3年の親(n=4,000)　(%)

### 教育関係者

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **自分だけでは思いつかなかった考え方や、ものの見方に触れられること** | 42.2 |
| 2位 | **興味のあることを、より深く学んだり調べたりしやすくなること** | 39.0 |
| 3位 | **知りたい情報や必要な情報を、短時間で得やすくなること** | 38.2 |
| 4位 | 文章の作成、要約、翻訳などを効率よく行えること | 33.8 |
| 5位 | 生成AIを使いこなす知識や技術が身につき、将来の選択肢が広がること | 30.4 |

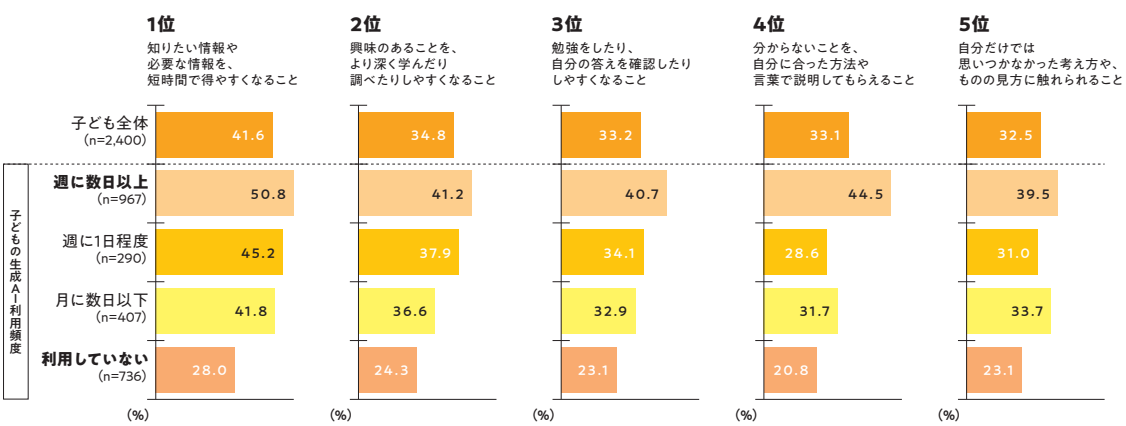
教育関係者(n=500)　(%)

## 生成AIを利用する子どもは、生成AIへの期待値が高い

図2の子ども(小学4年～高校3年)が生成AIに期待していることTOP5について、生成AI利用頻度別に見てみると、1位の「知りたい情報や必要な情報を、短時間で得やすくなること」は、「週に数日以上」利用する子どもでは期待度が50.8%と一段と高く、他の項目でも期待度が総じて高くなっています。利用する頻度が高い子どもの方が期待度が高く、「利用していない」子どもでは期待度が総じて低くなっています[図3]。生成AIを利用する子どもほど、生成AIの普及に期待していることがうかがえます。

**[図3]子どもの生成AIに対する期待(生成AI利用頻度別)**

子ども:Q. 生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、期待していることは?(複数回答)　対象:小学4年～高校3年の子ども(n=2,400)




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 2.生成AIの利用・普及に対する期待と不安

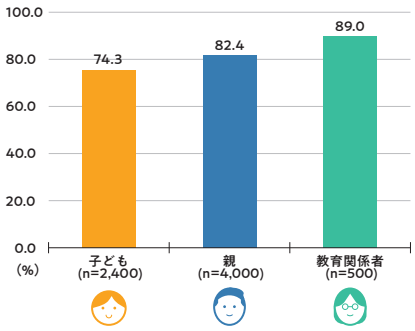
## 生成AIで「自分で考える機会」は減る？
## 自分の感じ方より生成AIの答えを優先することに、親よりも教育関係者が高い懸念

一方で、生成AIの利用が広がることに不安・懸念を感じるかを聞くと、子どもの74.3%、親の82.4%、教育関係者の89.0%が何らかの不安を感じていると答えました［図4］。不安・懸念を感じている内容を聞くと、子どもは「間違った情報や、偏った情報を正しいと思ってしまうこと」（36.3%）が最も高い一方、親・教育関係者では「自分で考える前に、生成AIに答えを求めるようになること」が最多となり、親48.3%、教育関係者59.0%でした。子どもは情報の正確さを、親や教育関係者は自分で考える機会への影響を、より懸念している傾向が見られます。さらに注目したいのは、「自分がどう感じたかよりも生成AIの答えを優先し、自分の言葉や方法で表す機会が減ること」への懸念です。子どもでは21.2%だったのに対し、親32.8%、教育関係者46.2%と、立場によって差が見られました［図5］。

答えを簡単に得られる時代だからこそ、自分はどう感じ、どう考えるのか。生成AIとの関わりの中で、子どもの感じ方や考えを大切にすることについて、改めて考えさせられる結果です。

**［図4］生成AIに対する不安**

子ども・親・教育関係者：Q.子どもによる生成AIの利用や生成AIが社会に広がることに不安・懸念に感じるか？




**［図5］生成AIに対する不安・懸念点TOP5（親・子・教育関係者）**

子ども・親・教育関係者：Q.子どもによる生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、不安・懸念に感じることは？（複数回答）

### 子ども

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **間違った情報や、偏った情報を正しいと思ってしまうこと** | 36.3 |
| 2位 | 自分で考える前に、生成AIに答えを求めるようになること | 33.5 |
| 3位 | 生成AIに頼りすぎて、生成AIがないと物事を進めにくくなること | 33.3 |
| 4位 | **自分がどう感じたかよりも生成AIの答えを優先し、自分の言葉や方法で表す機会が減ること** | 21.2 |
| 5位 | 子どもの年齢にふさわしくない内容や、有害な情報に触れること | 20.6 |

小学4年～高校3年の子ども（n=2,400）（%）

### 親

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **自分で考える前に、生成AIに答えを求めるようになること** | 48.3 |
| 2位 | 生成AIに頼りすぎて、生成AIがないと物事を進めにくくなること | 45.0 |
| 3位 | 間違った情報や、偏った情報を正しいと思ってしまうこと | 40.1 |
| 4位 | **自分がどう感じたかよりも生成AIの答えを優先し、自分の言葉や方法で表す機会が減ること** | 32.8 |
| 5位 | 試行錯誤したり、自分で調べたり学んだりする機会が減ること | 32.6 |

未就学児～高校3年の親（n=4,000）（%）

### 教育関係者

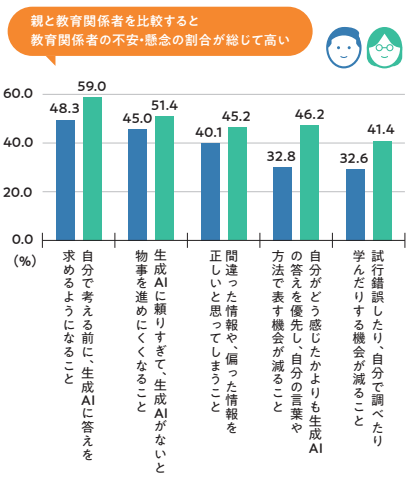
| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **自分で考える前に、生成AIに答えを求めるようになること** | 59.0 |
| 2位 | 生成AIに頼りすぎて、生成AIがないと物事を進めにくくなること | 51.4 |
| 3位 | **自分がどう感じたかよりも生成AIの答えを優先し、自分の言葉や方法で表す機会が減ること** | 46.2 |
| 4位 | 間違った情報や、偏った情報を正しいと思ってしまうこと | 45.2 |
| 5位 | 試行錯誤したり、自分で調べたり学んだりする機会が減ること | 41.4 |

教育関係者（n=500）（%）

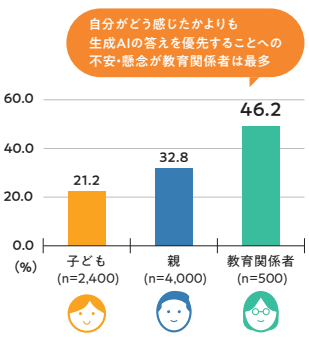
**①子どもと親の不安・懸念点比較**（親のTOP5比較）




**②親と教育関係者の不安・懸念点比較**（親のTOP5比較）




**③「自分がどう感じたかよりも生成AIの答えを優先」三者比較**




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 2.生成AIの利用・普及に対する期待と不安

## 生成AIを利用する子どもは、生成AIへの依存や、誤った情報を正しいと思ってしまうことに不安を感じている

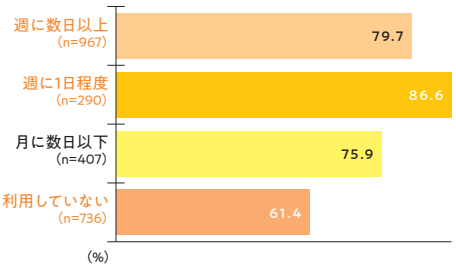
子どもの生成AI利用頻度別に生成AIの普及に対する不安度を見てみます。図4の通り子ども（小学4年～高校3年）の74.3%が不安を感じていますが、「週に数日以上」利用する子どもは79.7%、「週に1日程度」の子どもは86.6%と、利用していない子どもの61.4%よりも不安を感じる割合が高くなっています［図6-1］。

また、不安に感じているTOP5の項目を生成AIの利用頻度別に見ていくと、不安があると答えた割合は、利用している各群で未利用群を上回っています。特に3位の「生成AIに頼りすぎる」では、利用している子どもの間で比較すると、利用頻度が高い群ほど不安を感じる割合が高くなっています［図6−2］。

生成AIを利用している子どもでは、未利用の子どもに比べ、不安を感じる割合が高い項目が多く見られました。情報の真偽や生成AIへの依存といったリスクを、身近な問題として捉えているのかもしれません。

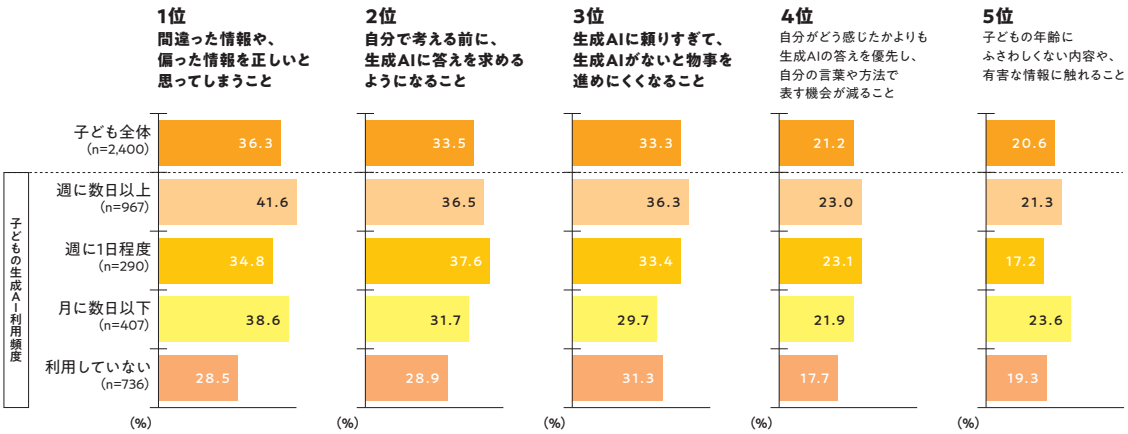
**［図6-1］子どもの生成AIに対する不安（生成AI利用頻度別）**

子ども:Q.生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについての不安は?（スコアは不安がある）
対象:小学4年～高校3年の子ども（n=2,400）




**［図6-2］生成AI利用頻度別　子どもの生成AIに対する不安**

子ども:Q. 生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、不安に感じることは?（複数回答）　対象:小学4年～高校3年の子ども（n=2,400）




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 3.生成AIが親子コミュニケーションに与える影響

**これまでは生成AIの普及に対して子ども、親、教育関係者それぞれの視点から期待すること、不安に思うことを聞いてきました。ここからは、生成AIの家庭での利用により、親子のコミュニケーションにどのような変化が予想されているのかを見ていきます。**

## 生成AIの家庭利用の普及により、子ども・親ともに約4割が「生成AIをきっかけに会話が増える」と期待

生成AIの利用によって、親子のコミュニケーションが増える可能性について聞きました。すると、子どもも親も「生成AIから得た答えや情報について、親子で話す機会が増える」が最も多く、子ども40.8%、親42.6%となりました。また、教育関係者では「生成AIの使い方や家庭でのルールについて、親子で話す機会が増える」が44.2%で最も多くなりました[図7-1]。
生成AIの答えを親子で確かめたり、使い方について話し合ったりするなど、新たなコミュニケーションが生まれる可能性が見えてきました。生成AIを答えを得るための道具として使うだけでなく、親子で一緒に考え、互いの感じ方や考え方を共有するきっかけとして活用することも期待されます。

**[図7-1]生成AI利用によりコミュニケーションが「増える」**

親・子ども・教育関係者:Q.生成AIが家庭で利用されるようになることで、増える親子コミュニケーションは?(スコアは「そう思う」「ややそう思う」の合計値)

**子ども**

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **生成AIから得た答えや情報について、親子で話す機会が増える** | 40.8 |
| 2位 | 生成AIの答えと、自分や家族の感じ方・考え方の、違いについて話す機会が増える | 38.4 |
| 3位 | 生成AIをきっかけに、子どもの興味や好きなことを家族で共有する機会が増える | 38.3 |
| 4位 | 生成AIの使い方や家庭でのルールについて、親子で話す機会が増える | 38.2 |
| 5位 | 生成AIの答えが正しいかどうかを、親子で一緒に確かめる機会が増える | 38.0 |

小学4年～高校3年の子ども(n=2,400)　(%)

**親**

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **生成AIから得た答えや情報について、親子で話す機会が増える** | 42.6 |
| 2位 | 生成AIの使い方や家庭でのルールについて、親子で話す機会が増える | 40.6 |
| 3位 | 生成AIの答えが正しいかどうかを、親子で一緒に確かめる機会が増える | 40.3 |
| 4位 | 生成AIの答えと、自分や家族の感じ方・考え方の違いについて話す機会が増える | 38.0 |
| 5位 | 生成AIをきっかけに、子どもの興味や好きなことを家族で共有する機会が増える | 36.9 |

未就学児～高校3年の親(n=4,000)　(%)

**教育関係者**

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | **生成AIの使い方や家庭でのルールについて、親子で話す機会が増える** | 44.2 |
| 2位 | 生成AIをきっかけに、子どもの興味や好きなことを家族で共有する機会が増える | 38.4 |
| 3位 | 生成AIの答えが正しいかどうかを、親子で一緒に確かめる機会が増える | 37.4 |
| 4位 | 生成AIから得た答えや情報について、親子で話す機会が増える | 36.8 |
| 5位 | 生成AIの答えと、自分や家族の感じ方・考え方の、違いについて話す機会が増える | 36.0 |

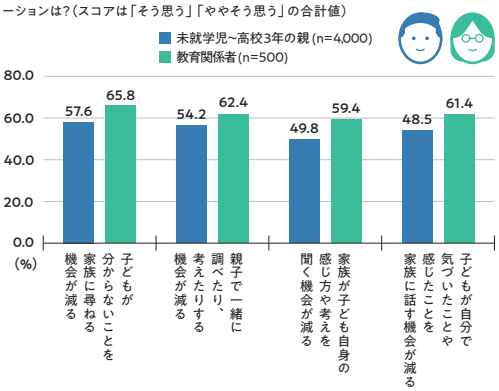
教育関係者(n=500)　(%)

## 一方で、「子どもが家族に質問する機会の減少」を心配する声が多数 生成AIの普及で変わる親子のコミュニケーションに、親よりも教育関係者が懸念

次に、生成AIが家庭で利用されるようになることで、親子のコミュニケーションが減る可能性について聞きました。すると、親・教育関係者ともに「子どもがわからないことを家族に尋ねる機会が減る」が最も多く、親57.6%に対し、教育関係者は65.8%となりました。また、その他の項目でも教育関係者の回答割合が親を上回っており、教育関係者の方が親子のコミュニケーションへの影響を強く懸念している傾向がうかがえます[図7-2]。
多くの期待と不安を抱かれている生成AIですが、出力された内容の真偽まで把握する力の育成や、導き出されている結論や答えに対し、「なぜそうなっていると思うか」や「この答えについてどう思っているのか」と、子どもの受け取り方や感じ方を親が聞くようなコミュニケーションが重要になっていくのかもしれません。

**[図7-2]生成AI利用によりコミュニケーションが「減る」(親と教育関係者比較)**

親・教育関係者:Q.生成AIが家庭で利用されるようになることで、減る親子コミュニケーションは?(スコアは「そう思う」「ややそう思う」の合計値)




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 3.生成AIが親子コミュニケーションに与える影響

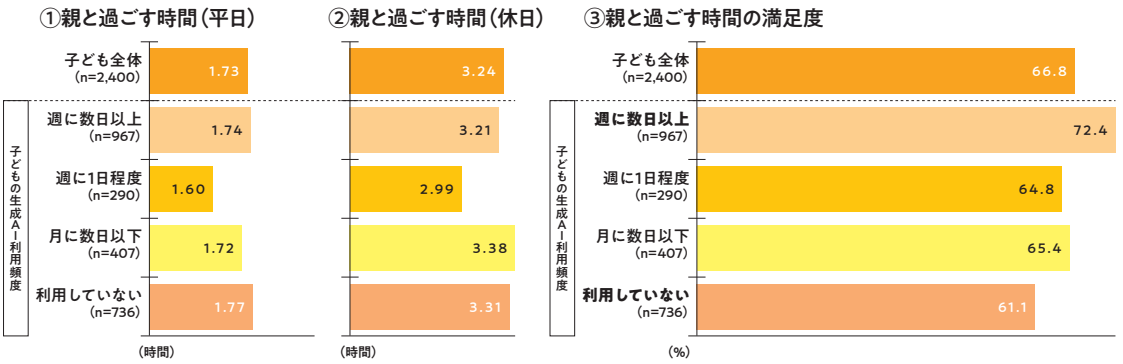
## 子どもの生成AIの利用頻度によって、親子時間に大きな差は見られない
## 特に高頻度で使用する子どもは、親と過ごす時間の満足度が高め

子どもの生成AIの利用頻度によって、親子のコミュニケーション時間や親と過ごす時間に対する満足度は変化するのか、見てみました。

子ども（小学4年～高校3年）が親と一緒に過ごす時間は、全体で平日は1日平均1.73時間、休日は3.24時間でした。子どもの生成AI利用頻度別に見ると、平日は生成AIを「利用していない」子ども（1.77時間）が、休日は「月に数日以下」の子ども（3.38時間）がやや長くなっていますが、大きな差は生じませんでした。しかし、親と過ごす時間の満足度を聞くと、満足度が最も高いのは「週に数日以上」利用する子ども（72.4%）、最も低いのは「利用していない」子ども（61.1%）でした［図7-3］。

**［図7-3］生成AI利用頻度別　子どもの生成AI利用と親子のコミュニケーション**

子ども:Q.①②自宅で親と過ごす時間は？　③親と過ごす時間に満足しているか？（スコアは「とても満足している」「まあ満足している」の合計値）
対象:小学4年～高校3年の子ども（n=2,400）






【京都大学大学院教育学研究科 高橋雄介准教授に聞く】

### 生成AI利用を、答えを親子で確かめ、考えを交わすきっかけに

生成AIの登場によって、子どもが自ら疑問を調べたり、新しい考え方に触れたりする機会は広がっています。その中で大切にしたいのは、答えを得る過程で、子ども自身が何を考え、理解したかという点です。

高校生の数学課題を対象とした実験※では、通常のチャットに近い生成AIを使った群は、その後生成AIを使えない試験で、使わなかった群より成績が低くなりました。一方、自力で解けるように助言する設計の生成AIでは、同様の成績低下は認められませんでした。学力向上を確認した結果ではありませんが、使い方や支援の仕方に目を向ける必要性を示しています。

今回の調査では、生成AIをよく使う子どもほど、親子時間への満足度が高い結果でした。ただし、生成AIを使えば満足度が高まるとは限りません。もともとの親子関係や、家庭での使われ方が関係している可能性もあります。利用頻度だけでなく、誰と何のために使い、普段どのように親子が関わっているかを見ることが大切です。家庭でも、「どこに納得した?」「どうすれば○○について確かめられると思う?」と、本人の理解や考えを聞いてみる。生成AIから得た答えを親子で確かめ、考えを交わすきっかけにしていけるとよいと思います。

※Bastani, H., Bastani, O., Sungu, A., Ge, H., Kabakcı, Ö., & Mariman, R. (2025). Generative AI without guardrails can harm learning: Evidence from high school mathematics. Proceedings of the National Academy of Sciences, 122(26), Article e2422633122.

※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

## 第2章

### 暮らしにおける子どもの育ちに関する意識と実態

# 親子時間への満足度は、親よりも子どもが高い
# 親の思いと子どもの実感から見えてくる、日々の関わり

子どもの成長を支える上で、親や教育関係者は
何を大切にしているのでしょうか。
そして、子どもは、日々の暮らしや親との関わりをどのように
受け止めているのでしょうか。
本章では、子育てで大切にされていることと、
家庭での会話や一緒に過ごす時間など、親子の日常に目を向けます。
さらに、教育関係者が子どもの成長に必要と考える力や、
一人一人と向き合う上で感じている難しさも見ていきます。

忙しい毎日の中で、子どもに十分向き合えているか、
不安に思うこともあるかもしれません。
しかし、今回の調査では、
親子で過ごす時間への満足度、その時間を十分だと感じる割合は、
親よりも子どもの方が高い結果となりました。
親が大切にしていることと子どもの実感を重ね合わせながら、
日々の関わりの中にある気づきや、子どもの育ちを支えるヒントを探ります。

# 1.子育てで今、大切にされていること

**これからの時代を生きる子どもたちの成長を支える上で、親は日々何を大切にしているのでしょうか。**
**子どもは親が普段どのように関わってくれていると感じているのでしょうか。**
**小学4年～高校3年の子どもとその親の、親子2,400組に聞きました。親が子育てで大切だと考えること、子どもが実感している親の関わりについて、親子それぞれの回答から見ていきます。**

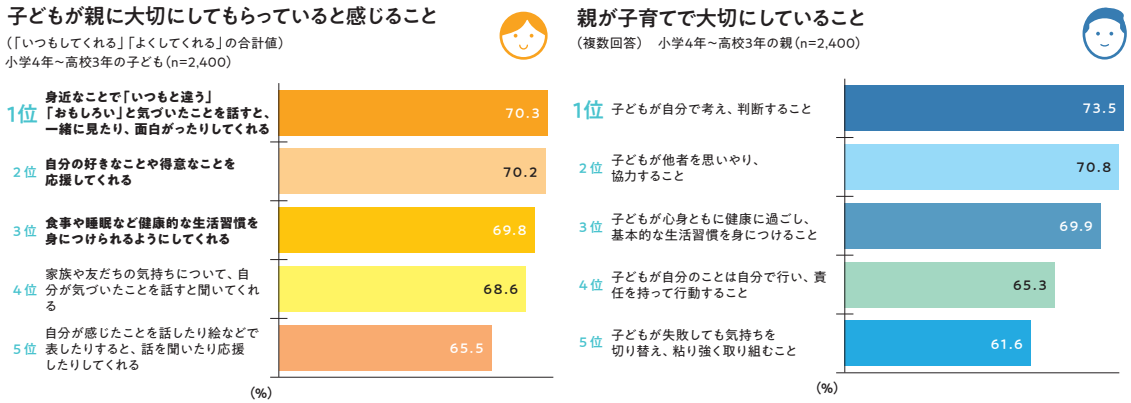
## 親が子育てで重視するのは「子どもが自分で考え、判断すること」
## 子どもが最も感じているのは「日常の発見や面白さを一緒に楽しんでくれる」関わり

小学4年～高校3年の子どもに、親が自分に対して大切にしてくれていると感じることを聞くと、最も多かったのは「身近なことで『いつもと違う』『おもしろい』と気づいたことを話すと、一緒に見たり、面白がったりしてくれる」(70.3%)でした。次いで「自分の好きなことや得意なことを応援してくれる」(70.2%)、「食事や睡眠など健康的な生活習慣を身につけられるようにしてくれる」(69.8%)が続きました。また、その親に、子育てで大切にしていることを聞くと、「子どもが自分で考え、判断すること」(73.5%)が最も多く、次いで「子どもが他者を思いやり、協力すること」(70.8%)、「子どもが心身ともに健康に過ごし、基本的な生活習慣を身につけること」(69.9%)が上位に挙がりました[図8-1]。

関連するテーマについて親子それぞれの回答を見ると「すぐに答えや方法を教えず、自分で考えたり選んだりさせてくれる」と感じる子どもは57.7%ですが、「子どもが自分で考え、判断すること」を大切にする親は73.5%でした。一方、親について「身近なことで『いつもと違う』『おもしろい』と気づいたことを話すと、一緒に見たり、面白がったりしてくれる」と感じる子どもは70.3%でした。一方、「子どもが身の回りの小さな変化や違いに気づくこと」を大切にする親は37.0%でした。親が大切にしていることと、子どもが日常の関わりの中で実感していることを、それぞれの回答から捉えることが大切です[図8-2]。

**[図8-1]親が子育てで大切にしていること、子どもが親に大切にしてもらっていると感じること**

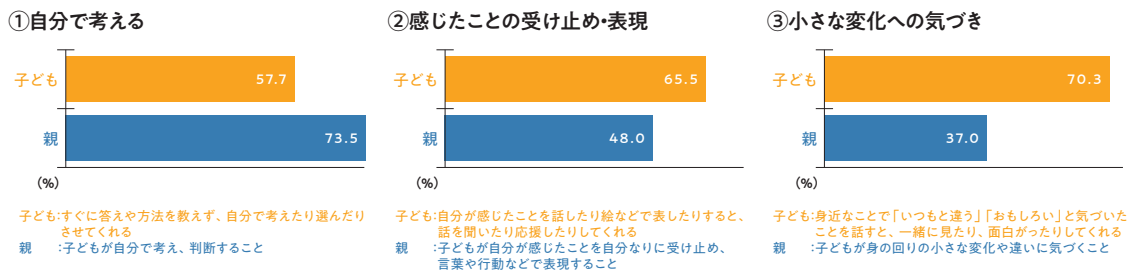
親:Q.日常の暮らしや家庭でお子さまを育てるうえで大切だと思うことは?(複数回答)
子ども:Q.あなたの親は次のことをどのくらい大切にしてくれていますか?




※親と子どもでは設問・回答形式が異なるため、左右のランキングは同じ項目同士の比較ではありません。

**[図8-2]関連する3つのテーマから見る親と子どもの回答**

親は「子育てで大切にしていること」、子どもは「親の関わりとして感じていること」への回答です(設問が異なります)。




子ども:すぐに答えや方法を教えず、自分で考えたり選んだりさせてくれる
親　:子どもが自分で考え、判断すること

子ども:自分が感じたことを話したり絵などで表したりすると、話を聞いたり応援したりしてくれる
親　:子どもが自分が感じたことを自分なりに受け止め、言葉や行動などで表現すること

子ども:身近なことで「いつもと違う」「おもしろい」と気づいたことを話すと、一緒に見たり、面白がったりしてくれる
親　:子どもが身の回りの小さな変化や違いに気づくこと

※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

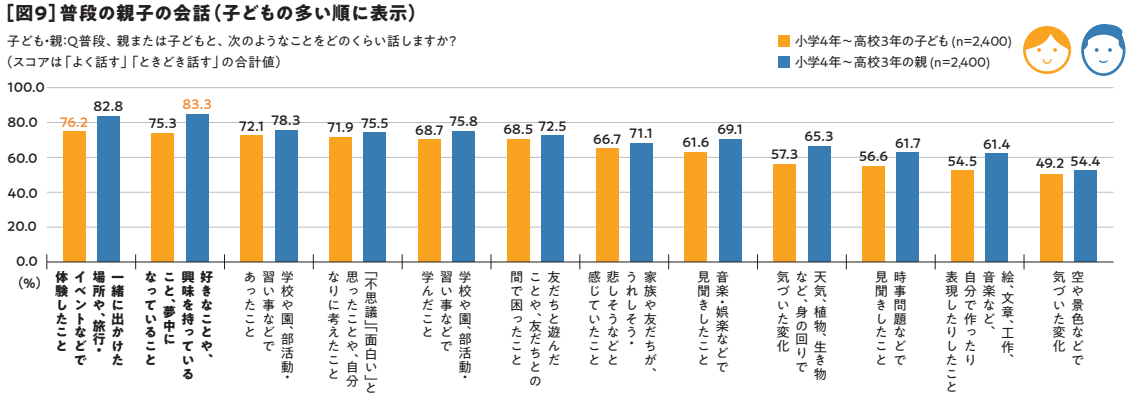
# 2.家庭における親子の日常

## 親子の会話の中心は、子どもの「好き」や「興味」など一緒に過ごした体験

親子の日常の会話の内容について、小学4年～高校3年の子どもと親それぞれに聞きました。親子ともに上位に挙がったのは、「一緒に出かけた場所や、旅行・イベントなどで体験したこと」「好きなことや、興味を持っていること、夢中になっていること」でした。子どもは「一緒に出かけた体験」（76.2%）が、親は「好きなことや興味」（83.3%）が最も高くなっています。また、「学校や、部活動・習い事などであったこと」も親子双方で上位となりました。子どもの興味や、親子で共有した体験が、日々の会話の大きなきっかけになっていることがうかがえます［図9］。

**［図9］普段の親子の会話（子どもの多い順に表示）**

子ども・親:Q.普段、親または子どもと、次のようなことをどのくらい話しますか?
（スコアは「よく話す」「ときどき話す」の合計値）



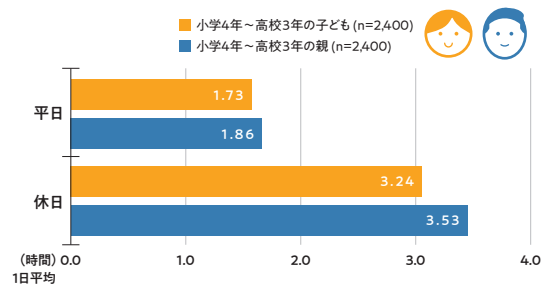

## 親子で過ごす時間は平日約1.73時間。子どもの6割以上が十分と感じる
## 「親子一緒に過ごす時間」について十分じゃないと感じているのは親のほう?
## 平日の充足感には14.5ポイントのギャップ

親子が一緒に過ごす時間について聞きました。小学4年～高校3年の子どもの回答では、平日が1日平均1.73時間、休日が3.24時間、親の回答では平日が1日平均1.86時間、休日が3.53時間となり、親子でおおむね近い結果となりました［図10］。また、親子で過ごす時間を「十分」と感じている割合は、平日が子ども60.0%:親45.5%、休日が子ども63.9%:親56.0%となり、平日では14.5ポイントの差が見られました［図11］。

親子で過ごす時間の長さについては親と子どもで近い回答が得られた一方、その時間を十分だと感じる割合は、親よりも子どもの方が高く、親子で受け止め方に違いがあることがうかがえます。親が感じているほど、子どもは一緒に過ごす時間を不足していると感じていないのかもしれません。親子で過ごす時間は、その長さだけでなく、どのように過ごすかにも目を向けさせるような結果といえます。

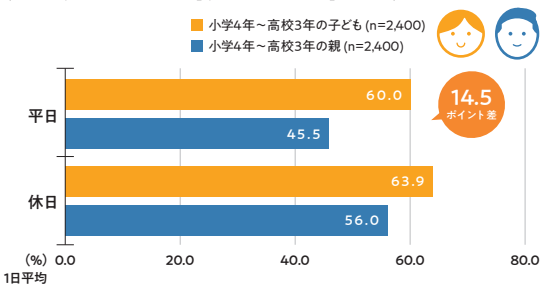
**［図10］親子で一緒に何かを見たり聞いたり、考えを共有したりする時間**

子ども・親:Q.自宅で親子で一緒に何かを見たり聞いたり、自分の考えや感じ方を共有したりして過ごす時間は1日あたりどのくらいですか?




**［図11］親子で一緒に過ごす時間への評価**

子どもと親:Q.親子で過ごす時間についてどう感じますか?
（スコアは「とても十分だと感じる」「まあ十分だと感じる」の合計値）




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

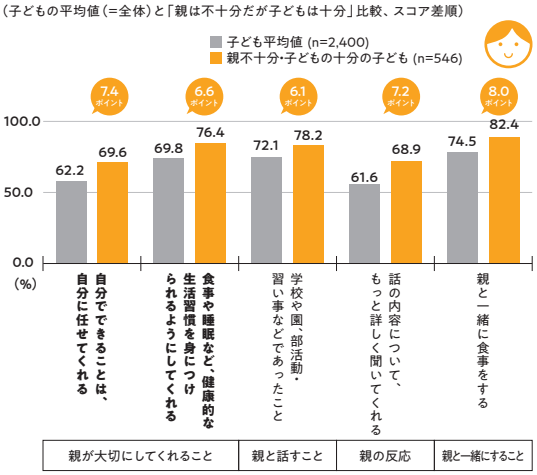
# 2.家庭における親子の日常

## 親は不十分でも、子どもは親子時間を十分と感じる家庭では「一緒に食事をする」「自分に任せてくれる」「話を詳しく聞いてくれる」と答えた子どもの割合が、全体より高い

図11の親子で過ごす時間について、〈親は不十分だが子どもは十分〉と感じている家庭の子どもの傾向を調べました。〈親は不十分だが子どもは十分〉と感じている家庭の子どもは、親が「自分でできることは、自分に任せてくれる」と感じる割合が子どもの平均値（全体）と比べて7.4ポイント、「食事や睡眠など、健康的な生活習慣を身につけられるようにしてくれる」は6.6ポイント高くなっています。「学校や園、部活動・習い事などであったこと」を親と話す子どもは全体より6.1ポイント高く、会話したとき親が「話の内容について、もっと詳しく聞いてくれる」と感じる子どもは7.2ポイント、「親と一緒に食事をする」子どもは全体より8.0ポイント高くなっています［図12］。親が「まだ足りない」と感じていても、日々の関わりは子どもに届いているのかもしれません。食事を共にする、話を聞く、本人に任せるといった関わりを、子どもがどう受け止めているかにも目を向けたいところです。

**［図12］子どもが親に認めてもらえると感じること**

（子どもの平均値（＝全体）と「親は不十分だが子どもは十分」比較、スコア差順）

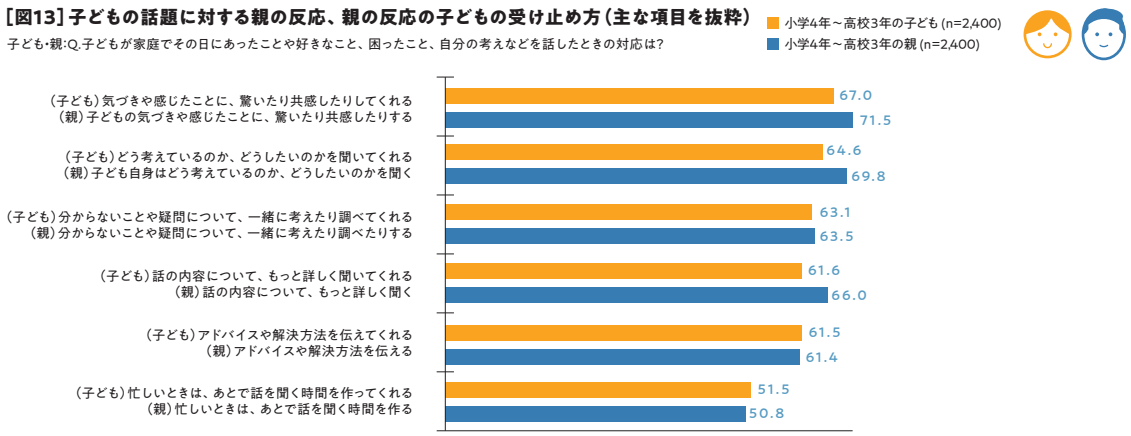



## 子どもの気づきに共感する親は約7割。子どももその関わりを実感忙しいときは「あとで話を聞いてくれる」も親子ともに約半数

親子で会話をしたときの親の対応について聞きました。子どもが、親の対応として実感しているのは、「気づきや感じたことに、驚いたり共感したりしてくれる」（67.0%）、「どう考えているのか、どうしたいのかを聞いてくれる」（64.6%）が上位に挙げられました。親も「子どもの気づきや感じたことに、驚いたり共感したりする」（71.5%）が最も高く、「子ども自身はどう考えているのか、どうしたいのかを聞く」（69.8%）が続いています。また、子どもの51.5%が「忙しいときは、あとで話を聞く時間を作ってくれる」と答えていますが、親も50.8%が「忙しいときは、あとで話を聞く時間を作る」と回答しています。子どもが感じている関わりと親が意識している関わりには、共通する傾向が見られました［図13］。子どもの日々の気づきや感じたことに共感し、すぐには難しくてもその思いや考えに耳を傾ける時間を設けたりする関わりが、親と子ども双方の回答からうかがえます。

**［図13］子どもの話題に対する親の反応、親の反応の子どもの受け止め方（主な項目を抜粋）**

子ども・親：Q.子どもが家庭でその日にあったことや好きなこと、困ったこと、自分の考えなどを話したときの対応は？




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

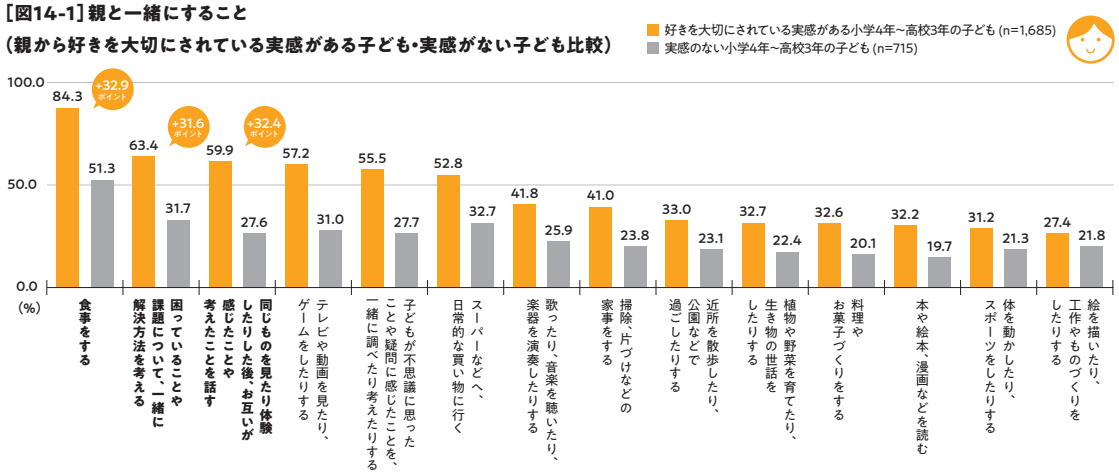
# 2.家庭における親子の日常

## 親から「好きを大切にしてもらっている」と実感する子どもに共通するのは、「一緒に食事をする」「同じものを見る」などの日常的な親子の時間だった？

図8-1で、親が「自分の好きなことや得意なことを応援してくれる」と実感している子どもと、実感していない子どもでは、普段の親子の過ごし方にどのような違いがあるのでしょうか。

まず、親から「好き」を大切にされている実感がある子どもは、実感がない子どもと比べ全ての項目でスコアが高く、親と一緒にすることが多いことが分かります。特に「食事をする」（+32.9ポイント）、「困っていることや課題について、一緒に解決方法を考える」（+31.6ポイント）、「同じものを見たり体験したりした後、お互いが感じたことや考えたことを話す」（+32.4ポイント）は30ポイント以上も高くなっています［図14-1］。特別な体験に限らず、食事や買い物など、日常の時間を一緒に過ごすことにもヒントがありそうです。子どもが自分で取り組む機会を大切にしながら、ときには親子で同じものを見たり体験したりすることも、関わり方の一つかもしれません。

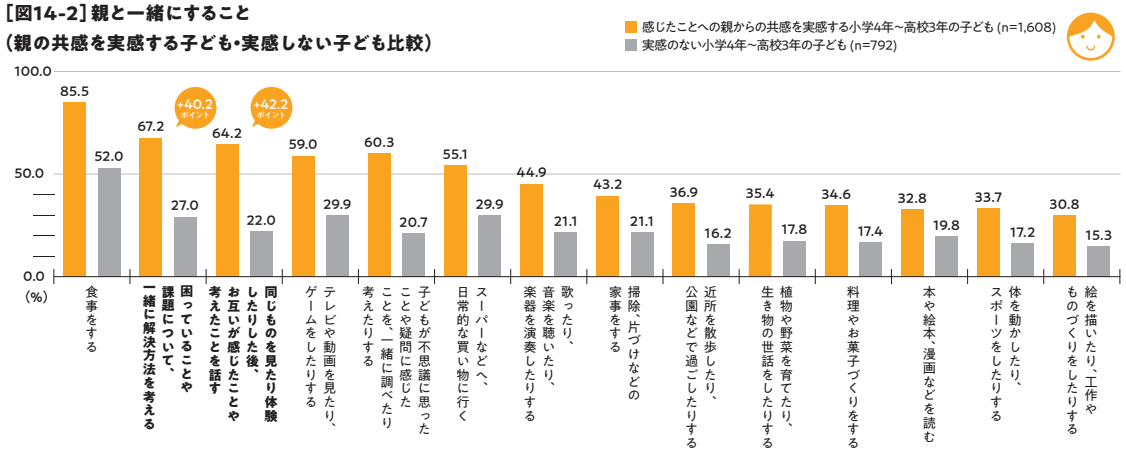
**［図14-1］親と一緒にすること**
**（親から好きを大切にされている実感がある子ども・実感がない子ども比較）**




## 気づきや感じたことを親から共感してもらっている実感のある子どもは、親と一緒にすることが多く、実感しない子どもと比べ40ポイントもの差

同様に、図13で「親が自分の気づきや感じたことに、驚いたり共感したりしてくれる」と回答した子どもが、普段親と一緒にしていることを見るとこちらも親の共感を実感する子どものスコアが総じて高くなっています。中でも「困っていることや課題について、一緒に解決方法を考える」（+40.2ポイント）、「同じものを見たり体験したりした後、お互いが感じたことや考えたことを話す」（+42.2ポイント）は約40ポイントも高くなっています［図14-2］。

**［図14-2］親と一緒にすること**
**（親の共感を実感する子ども・実感しない子ども比較）**




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 2.家庭における親子の日常

## 「子どもが自分で考え、判断すること」を大切にする一方、親の4割超が予定や準備を先回り

図8-1の調査では、子育てにおいて「子どもが自分で考え、判断すること」を大切にする親が7割を超え、図9・13では日常の会話でも、子どもの気づきや考えを受け止める関わりが見られました。一方で、子どもが困らないように、親が先回りして対応する場面もあります。

未就学児～高校3年生の親に、日常の暮らしの中で子どもに対して行うことを聞いたところ、「子どもが困らないように、予定や準備を親が先回りして整える」が42.2%と最も高く、「子どもが失敗しないように、うまくできる方法や手順を先に教える」が37.1%と続きました。また、「安全面が気になり、子どもが試す前に止める」も34.4%でした［図15］。子どもが自ら考え、行動することを大切にする姿勢が見られる一方で、困ったり失敗したりしないよう、親がつい先回りして支えようとするという実態も明らかになりました。

**［図15］暮らしの中で子どもに対してしてしまうこと**

親:Q.日常の暮らしや家庭で、次のようなことをする頻度は?
（スコアは「非常によくする」「よくする」の合計値）
対象:未就学児～高校3年の親（n=4,000）

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | 子どもが困らないように、予定や準備を親が先回りして整える | 42.2 |
| 2位 | 子どもが失敗しないように、うまくできる方法や手順を先に教える | 37.1 |
| 3位 | 安全面が気になり、子どもが試す前に止める | 34.4 |
| 4位 | 汚れたり散らかったりすることが気になり、やろうとしていることをやめさせる | 34.1 |
| 5位 | 子ども自身でできそうなことでも、時間がかかるため親が代わりに行う | 33.3 |
| 6位 | 時間や効率を考え、子ども自身に任せず、やり方や進め方を親が決める | 33.1 |
| 7位 | 勉強や予定を優先し、子どもが好きなことや夢中になっていることを中断させる | 28.9 |
| 8位 | 子どもが自分で考える前に、答えや方法を教える | 26.9 |

（%）

コラム❶ ちょっと気になる調査の発見

**自分が子どもの頃は「健康・生活習慣」、今は「自分で考え、判断すること」。子育てで大切にしたいことにも違い?**

今の親に、あなた自身が子どもの頃に大切にされていたと思うもの、現在、日常の暮らしや家庭でお子さまを育てるうえで、大切だと思うことを聞きました。子どもの頃に大切にされていたことでは「心身ともに健康に過ごし、基本的な生活習慣を身につけること」（39.4%）が1位だった一方、今の子育てでは「自分で考え、判断すること」（70.5%）が1位となりました。
親自身が受けてきた子育てと、今、子どもに大切にしたいと考えることには違いが見られます。こうした違いも、今の親が子どもとの関わり方を考え、試行錯誤する背景の一つなのかもしれません。

| 昔 子どもの頃に大切にされていたこと | | 今 今の子育てで大切だと思うこと | |
|---|---|---|---|
| 心身ともに健康に過ごし、基本的な生活習慣を身につけること | 39.4 | 自分で考え、判断すること | 70.5 |
| 他者を思いやり、協力すること | 39.0 | 他者を思いやり、協力すること | 68.4 |
| 自分のことは自分で行い、責任を持って行動すること | 35.0 | 心身ともに健康に過ごし、基本的な生活習慣を身につけること | 67.1 |
| 未就学児～高校3年の親（n=4,000）（%） | | 未就学児～高校3年の親（n=4,000）（%） | |



【京都大学大学院教育学研究科 高橋雄介准教授に聞く】

### 子どもの意思を確かめ、任せ方・支え方を調整する

子どもが自分で考え、判断することを大切にしたいと思っていても、親が先回りする場面は少なくありません。その背景には、安全への配慮や、限られた時間で生活を進める必要性など、さまざまな事情があると思います。

心理学では、親から独立して行動することと、自分の意思に基づいて行動することを区別して考えます※1。自律性には、自分の行動に納得し、自分の意思で取り組んでいるという側面があり、必要な助けを借りながらでも育まれます。親が子どもの意思を尊重して支えることは、子どものウェルビーイングと関連することも報告されています※2。「次はどうしたい?」「今はどこを手伝ってほしい?」と本人の考えを確かめ、年齢や経験、その日の状態に合わせて、任せる部分と支える部分を調整することが大切です。子どもの反応を受けて、親も関わり方を変えていく、相互のやりとりとして考えることが大切です。

自分で選び、考え、試す機会は、特別な体験の中だけにあるものではありません。献立の一部を一緒に決める、買い物の順番を考えるなど、日常にも取り入れられます。大人が方法を決める前に、子どもの案を一度聞いてみる。うまくいかなければ「次はどうしてみようか」と一緒に考える。忙しい毎日の中でも、取り入れやすい場面を一つ選ぶところから始めてみてもよいと思います。

※1Soenens, B., Vansteenkiste, M., Lens, W., Luyckx, K., Goossens, L., Beyers, W., & Ryan, R. M. (2007). Conceptualizing parental autonomy support: Adolescent perceptions of promotion of independence versus promotion of volitional functioning. Developmental Psychology, 43(3), 633–646. h
※2Bradshaw, E. L., Duineveld, J. J., Conigrave, J. H., Steward, B. A., Ferber, K. A., Joussemet, M., Parker, P. D., & Ryan, R. M. (2025). Disentangling autonomy-supportive and psychologically controlling parenting: A meta-analysis of self-determination theory's dual process model across cultures. American Psychologist, 80(6), 879–895.

※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

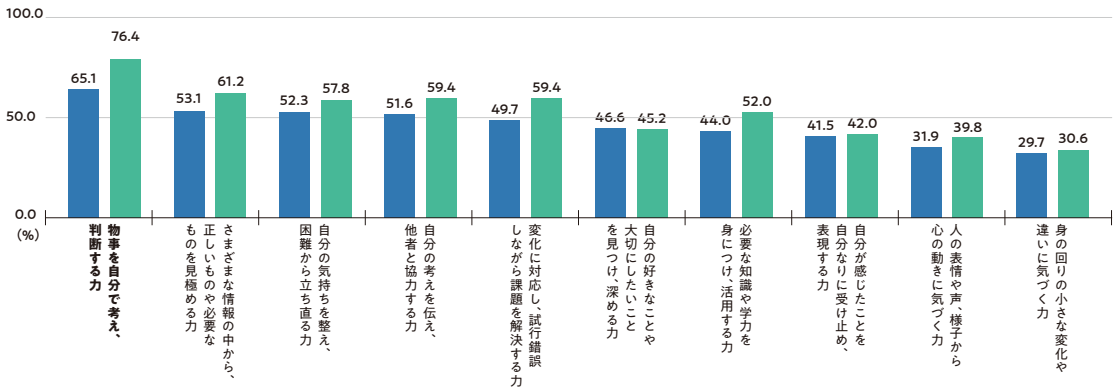
# 3.教育関係者に聞く、子どもの育ちと教育現場の今

## 答えがすぐに得られる時代、教育関係者が重視するのは「自分で考える力」
## 親でも割合が最多だが、教育関係者は約8割とより高い割合に

ここまでは、親が子育てで大切にしていることや、家庭における親子の日常を見てきました。では、日々子どもたちと向き合う教育関係者は、これからの子どもの成長にどのような力が必要だと考えているのでしょうか。教育関係者500人に、これからの子どもにとって大切になると思う力を聞いたところ、最も多かったのは「物事を自分で考え、判断する力」(76.4%)でした。次いで「さまざまな情報の中から、正しいものや必要なものを見極める力」(61.2%)、「自分の考えを伝え、他者と協力する力」「変化に対応し、試行錯誤しながら課題を解決する力」(いずれも59.4%)、「自分の気持ちを整え、困難から立ち直る力」(57.8%)が上位となりました。親の回答でも「物事を自分で考え、判断する力」(65.1%)が最多となっており、親・教育関係者ともに、子どもが自ら考え判断する力を重視していることが分かります。一方、教育関係者の回答を見ると、情報を見極める力や他者との協力、変化への対応なども約6割が挙げており、これからの子どもに求められる力を幅広く捉えている様子がうかがえます[図16]。

**[図16]これからの子どもにとって大切になる力(親と教育関係者比較)**

親・教育関係者:Q.これからの子どもにとって大切になると思う力は?(複数回答)




## 子どもが自ら考える力を育むには?
## 教育関係者の約半数が「一人一人と向き合う時間の不足」を課題に

教育関係者の多くが、これからの子どもたちには、自ら考え、判断し、試行錯誤する力が大切だと考えています。では、日々の教育・保育・指導の現場では、どのような関わりが大切にされているのでしょうか。

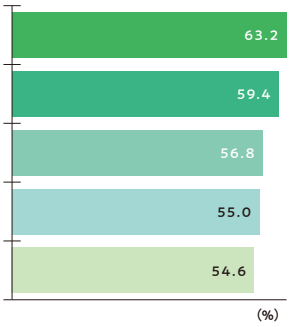
教育関係者500人に聞いたところ、「子どもが自分で考え判断すること」を「非常に大切」と回答した割合は63.2%と最も高く、他者を思いやり協力することや、失敗しても粘り強く取り組むことなども上位に挙がりました[図17-1]。

一方、子ども一人一人の気づきや考え、興味、表現などを受け止め、それぞれに応じた関わりを行う上での難しさを聞くと、「子どもと一人一人ゆっくり関わる時間が十分にない」(48.4%)が最多となりました。人数の多さによる個別対応の難しさや、安全面・集団生活上の制約なども挙げられています[図17-2]。子どもが考え、試し、表現することを大切にする一方で、その一人一人の気づきや考えに丁寧に向き合うことには、さまざまな難しさがあることがうかがえます。

※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

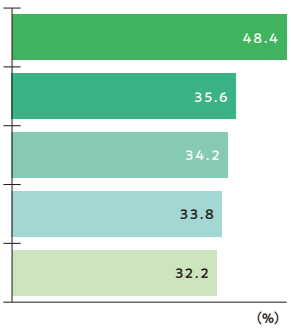
［図17-1］教育関係者が子どもの育ちで大切にしていること

教育関係者:Q.教育・保育・指導の現場で子どもと関わるうえで「非常に大切」なことは?　対象:教育関係者(n=500)　※スコアは「非常に大切」と回答した割合(上位5項目を掲載)




［図17-2］子ども一人一人に応じた関わりを行う上での難しさ

教育関係者:Q.教育・保育・指導の現場で、子ども一人一人の気づきや考え、興味、表現などを受け止め、それぞれに応じた関わりを行ううえで難しさを感じることは?(複数回答)
対象:教育関係者(n=500)(上位5項目を掲載)




家庭では、子どもの気づきや感じたことに共感し、考えに耳を傾ける姿勢が見られました。教育現場でも、一人一人の気づきや興味、表現を受け止めることが大切にされる一方、時間や個別対応の難しさが挙げられています。

家庭と教育現場、それぞれの立場から、子どもの考えや感じ方を大切にすることの重要性と、日々の関わりの実態が見えてきました。

次章では、こうした子ども一人一人の感じ方や気づきに関わる「感性」に目を向け、日々の暮らしとの関係を見ていきます。



【京都大学大学院教育学研究科 高橋雄介准教授に聞く】

## 「好き」が育つ機会と、それを支える環境を

次期学習指導要領の改訂に向けた議論では、「好き」を育み、「得意」を伸ばすことが、学びへの動機づけや、自らの人生を選び取ることと結びつけて位置づけられています※1。子どもが何に心を動かされ、何を知りたいと思うのかを大切にしていく必要があります。

ただし、今の「好き」や「得意」だけに目を向けるのではなく、これから何に出会い、関心を育てていけるかも重要です。興味の発達を説明するモデル※2では、ある場面で生まれた興味が、その後の経験や支援を通じて、持続的な興味へと深まる過程が示されています。学校で幅広く学ぶことも、まだ知らなかったものに触れ、新たな興味を持つ機会になります。

また、自分で考えることを支えるには、「面白いと思ったことをやってみよう」と任せるだけでなく、理解や経験に応じた手がかりを大人が示すことが大切です。探究学習の研究※3でも、適切なガイダンスが学習成果を高めることが報告されています。一方、今回の調査では、教育関係者の約半数が、一人一人とゆっくり関わる時間が十分にないと回答しました。子どもの疑問や試行錯誤を受け止める時間を確保するには、教職員で役割を分担したり、支援スタッフと業務を分担したりするなど、学校全体で支える体制が必要です。子どもの主体性を大切にすることと、それを支える大人の時間や余裕を確保することを、併せて考えていく必要があります。

※1 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会. (2026). 次期学習指導要領等に向けた審議まとめ(文部科学省)
※2 Hidi, S., & Renninger, K. A. (2006). The four-phase model of interest development. Educational Psychologist, 41(2), 111–127.
※3 Lazonder, A. W., & Harmsen, R. (2016). Meta-analysis of inquiry-based learning: Effects of guidance. Review of Educational Research, 86(3), 681–718.

※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

## 第3章

### 子どもの感性を支える、日々の暮らし

# 自分の「好き」に気付き、自ら考える力へ

生成AIの普及など、子どもを取り巻く環境が変化する中で、
改めて大切にしたいのが、子どもが感じ、考えること。
そして、前章で見てきた親子の日々の関わりです。
何に心が動き、何を面白いと感じるのか。
日々の小さな気づきや感動は、自分の「好き」を知るきっかけになります。
積水ハウスは、こうした感性を大切にすることが、
自分が大切にしたいことを見つけ、自ら考え、
進む道を選ぶ力につながり、一人一人の幸せを支えていくと考えています。

本章では、親や教育関係者の感性に対する意識と、
親子の会話や共有体験、住まいの環境との関わりを見ていきます。
調査から見えた傾向を手がかりに、
子どもの感性を、日々の暮らしの中でどう支えていけるのか、
子どもの育ちを考える上で、知識や経験だけでなく、
それぞれの感じ方や興味・関心にも目を向けていきます。

# 1.子ども一人一人の感じ方や考えを大切にする「感性」

**ここまで、子どもが自分で考え、判断することを大切にする親や教育関係者の意識と、日々の関わりを見てきました。積水ハウスは、子ども一人一人が自分らしく育っていくことを考える上で、「感性」に着目しています。「感性」は、子どもの成長においてどのような意味を持つのでしょうか。また、「感性」という言葉から、親や教育関係者はどのような力や特徴を思い浮かべるのでしょうか。それぞれの回答から、「感性」の重要性と、その捉え方を見ていきます。**

## 約8割の親・教育関係者が「感性」を子どもの成長において「大切にしたい力」「土台となる力」と回答

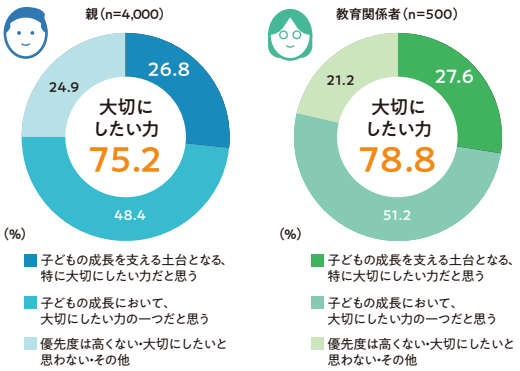
積水ハウスは、「自分の周りの世界の繊細な変化や他者の心の動きに気づき、それを自分なりに受け止め、考えたり表現したりする力」を「感性」と定義しています。上記の説明を提示した上で、子どもの成長においてその力をどのように位置付けるかを聞きました。

親の26.8%が「子どもの成長を支える土台となる、特に大切にしたい力」、48.4%が「子どもの成長において、大切にしたい力の一つ」と回答しました。教育関係者もそれぞれ27.6%、51.2%と、親と近い傾向が見られました。

「大切にしたい力」と捉える割合は、親75.2%、教育関係者78.8%と、いずれも8割近くに上りました［図18］。

**［図18］「感性」の重要性**

親・教育関係者:Q.子どもが成長するうえで、「自分の周りの世界の繊細な変化や他者の心の動きに気づき、それを自分なりに受け止め考えたり表現したりする力」の位置づけは?




## 「感性」のイメージは、親では五感や個性・センス、教育関係者では豊かな心や美しさを感じ取る力が上位に

また、「感性」という言葉そのものから思い浮かぶイメージについて、積水ハウスが考える定義を示さずに聞きました。親では「音、色、香り、手触りなどを五感で繊細に感じ取る力」「その人が生まれつき持っている個性やセンス」が上位となり、教育関係者では「喜びや悲しみなどを豊かに感じる心」「美しいものや芸術を味わい・よさを感じ取る力」が上位に挙がりました［図19］。

親は感覚や個性・センスを、教育関係者は感情の豊かさや美しさを感じ取る力を思い浮かべる傾向がうかがえます。

**［図19］「感性」のイメージ**

親・教育関係者:Q.「感性」という言葉から、どのような力や特徴を思い浮かべますか?（複数回答）

### 親

| | | |
|---|---|---|
| **1位** | **音、色、香り、手触りなどを五感で繊細に感じ取る力** | **41.4** |
| 2位 | その人が生まれつき持っている個性やセンス | 40.4 |
| 3位 | 喜びや悲しみなどを豊かに感じる心 | 40.3 |
| 4位 | 絵、音楽、文章、デザインなどを生み出す芸術的・創作的なセンス | 40.0 |
| 5位 | 自分が感じたことや考えたことを自分なりに表現する力 | 39.0 |

未就学児～高校3年の親（n=4,000）（%）

### 教育関係者

| | | |
|---|---|---|
| **1位** | **喜びや悲しみなどを豊かに感じる心** | **49.8** |
| 2位 | 美しいものや芸術を味わい・よさを感じ取る力 | 49.6 |
| 3位 | 音、色、香り、手触りなどを五感で繊細に感じ取る力 | 44.4 |
| 4位 | 絵、音楽、文章、デザインなどを生み出す芸術的・創作的なセンス | 42.0 |
| 5位 | その人が生まれつき持っている個性やセンス | 40.4 |

教育関係者（n=500）（%）

※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 1.子ども一人一人の感じ方や考えを大切にする「感性」

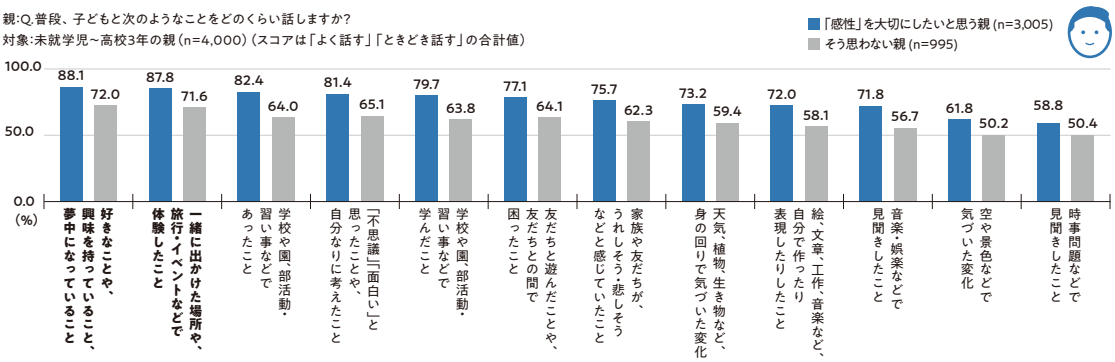
## 「感性」を大切にしたい親は、子どもの好きや興味・関心、イベントのほか、日常のさまざまな事柄について会話をしている

前述図18で「感性」を大切にしたい力だと思うと答えた親と、大切だと思わないと答えた親とで、家庭での子どもとの会話の度合いを比較してみました。子どもとの会話の度合いを5段階（よく話す、ときどき話す、どちらともいえない、あまり話さない、まったく話さない、で聞き、「よく話す」「ときどき話す」と答えた割合を見ると、「好きなことや興味を持っていること、夢中になっていること」について親子で会話をするのは、大切だと思う88.1%、そう思わない72.0%、「一緒に出かけた場所や旅行・イベントなどで体験したこと」は、大切だと思う87.8%、そう思わない71.6%となり、ほかの項目も全て「感性」を大切にしたい親の方がスコアが高くなっています［図20］。

「感性」を大切にしたい親ほど、子どもの好きや興味・関心、イベントのほか、日常のさまざまな事柄について会話をしている傾向が見られます。

**［図20］「感性」の捉え方別、普段の親子の会話度合い**

親：Q.普段、子どもと次のようなことをどのくらい話しますか？
対象：未就学児～高校3年の親（n=4,000）（スコアは「よく話す」「ときどき話す」の合計値）

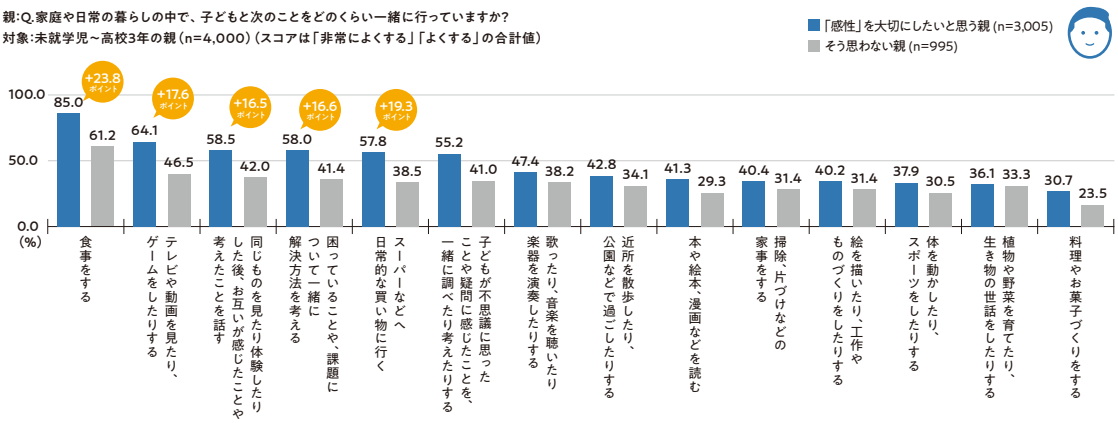



## 「感性」を大切にする子育てのヒントは、食事や買い物など、日常を子どもと共にする時間に

「感性」を大切にしたい力・成長の土台となる力、と答えた親と、大切だと思わないと答えた親とで、親子で一緒にすることを5段階（非常によくする、よくする、どちらともいえない、あまりしない、ほとんどしない）で比較しました。「非常によくする」「よくする」と答えた割合を見ると、こちらも大切にしたい親の方がスコアが高くなっています。両者のスコア差を見ると、「食事をする」のスコア差が23.8ポイントと最も大きくなっています。ほかにも「スーパーなどへ日常的な買い物に行く」（19.3ポイント差）、「テレビや動画を見たり、ゲームをしたりする」（17.6ポイント差）、「困っていることや課題について、一緒に解決方法を考える」（16.6ポイント差）、「同じものを見たり体験したりした後、お互いが感じたことや考えたことを話す」（16.5ポイント差）など、「感性」を大切にしたい親は、食事や買い物などの日常的な活動を、子どもと一緒によく行うと答えた割合が高くなっています［図21］。日々の暮らしの中で共に過ごす時間にも、子どもとの関わりを考えるヒントがありそうです。

**［図21］「感性」の捉え方別、親子で一緒にすること**

親：Q.家庭や日常の暮らしの中で、子どもと次のことをどのくらい一緒に行っていますか？
対象：未就学児～高校3年の親（n=4,000）（スコアは「非常によくする」「よくする」の合計値）




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

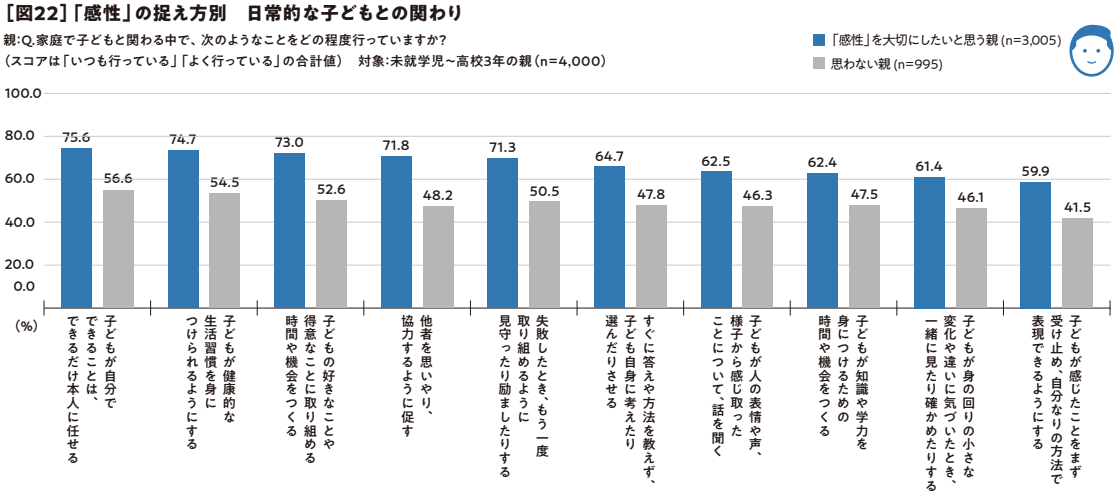
# 1.子ども一人一人の感じ方や考えを大切にする「感性」

## 感性を大切にしたい親は、子どもの生活や興味・気持ちに幅広く目を向けている

家庭での子どもとの関わりについてを5段階（いつも行っている、よく行っている、どちらともいえない、あまり行っていない、まったく行っていない）で聞き、「いつも行っている」「よく行っている」と答えた人のスコアを、「感性」が子どもの成長に重要だと思う・思わないの回答別に比較しました。すると、「感性」が子どもの成長に重要だと思う親は、「子どもが自分でできることは、できるだけ本人に任せる」「子どもが健康的な生活習慣を身につけられるようにする」「子どもの好きなことや得意なことに取り組める時間や機会をつくる」など、子どもと積極的に関わる割合が7割を超え高くなっています［図22］。

**［図22］「感性」の捉え方別　日常的な子どもとの関わり**

親：Q.家庭で子どもと関わる中で、次のようなことをどの程度行っていますか？
（スコアは「いつも行っている」「よく行っている」の合計値）　対象：未就学児～高校3年の親（n=4,000）




**コラム❷「感性」を大切にしたい親は、生成AIをどう見ているか？**

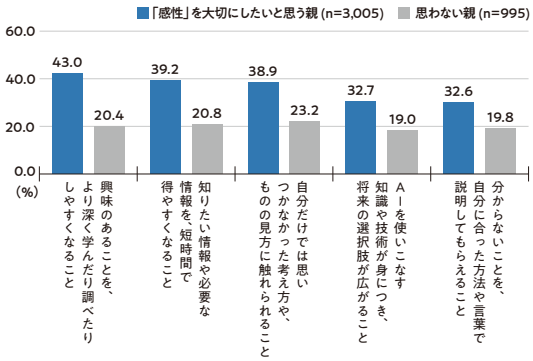
### 生成AI利用への不安も期待も大きい。

感性を大切にしたい親は、子どもとの会話や共有体験だけでなく、利用が広がる生成AIをどのように見ているのでしょうか。第1章で取り上げた生成AIへの期待と不安を、ここでは感性の重要性に対する意識から見ていきます。

生成AI利用が一般化する中で期待することを、「感性」が子どもの成長に重要だと思う・思わないの回答別に見ると、重要だと思う親の方が全ての項目で期待度が高くなっています。また、不安に感じることも「感性」が重要だと思う親の方が、全ての項目で高くなっています。前述の通り「感性」を大切にしたい親ほど、子どもとの日常の会話や共有体験が多い傾向も見られたことから、こうした親は、子どもが感じ考える機会を大切にしているからこそ、生成AIがもたらす新たな可能性と、その影響の両方に関心を寄せているのかもしれません。

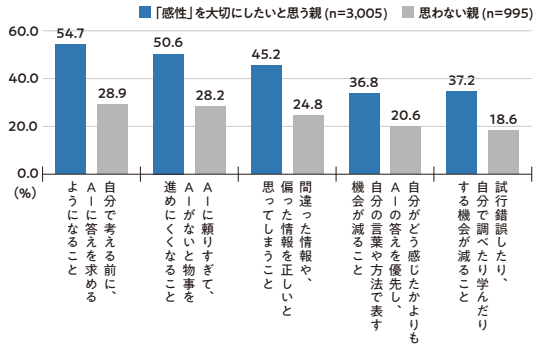
**「感性」の捉え方別　生成AIに対する期待**

親：Q.子どもによる生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、
期待を感じることは？（複数回答）　対象：未就学児～高校3年の親（n=4,000）




**「感性」の捉え方別　生成AIに対する不安・懸念点**

親：Q.子どもによる生成AIの利用や生成AIが社会に広がることについて、
不安・懸念に感じることは？（複数回答）　対象：未就学児～高校3年の親（n=4,000）




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

# 2.親子の関わりと、子どもの日常を支える住まい

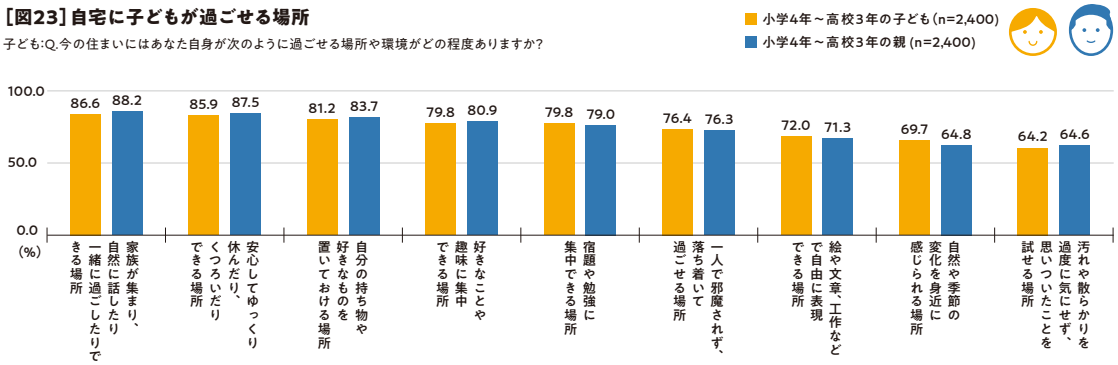
**ここまでの調査では、子どもの「感性」を大切にしたい親ほど、食事や買い物などの日常を子どもと一緒に過ごし、子どもの「好き」や考えを尊重する傾向が見られました。こうした親子の関わりや、子どもが自分の好きなことに取り組む日常の場となるのが住まいです。ここでは、子どもが過ごせる場所や環境に目を向け、親子で過ごす時間への満足度や、「感性」を大切にする意識との関連を見ていきます。**

## 今の住まいに子どもが過ごせる場所、親子それぞれの回答から見える実態

小学4年生～高校生の子どもとその親とに、今の住まいにどのような場所や環境があるかを4段階（十分にある、ある程度ある、あまりない、まったくない）でそれぞれ聞きました。「十分にある」「ある程度ある」と答えた割合をみると、子どもの回答では、「家族が集まり自然に話したり一緒に過ごしたりできる場所」「安心してゆっくり休んだりくつろいだりできる場所」があることが上位となりました。また、「自分の持ち物や好きなものを置いておける場所」「好きなことや趣味に集中できる場所」があるという回答も多く、親の回答でも同様の傾向が見られました［図23］。

**［図23］自宅に子どもが過ごせる場所**

子ども:Q.今の住まいにはあなた自身が次のように過ごせる場所や環境がどの程度ありますか？



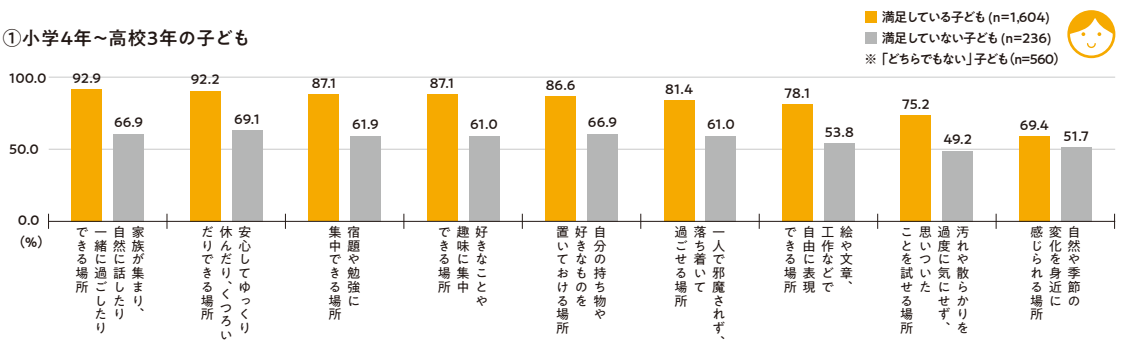

## 親子で過ごす時間に満足している親・子どもほど、今の住まいに過ごせる場所があると回答

住まいの環境について、親子で過ごす時間への満足度別に比較しました。「家族が集まり自然に話したり一緒に過ごしたりできる場所」があると答えた割合は、親子時間に満足している子ども92.9%、満足していない子ども66.9%でした。「安心してゆっくり休んだりくつろいだりできる場所」も、それぞれ92.2%、69.1%となっています。親の回答でも、親子時間に満足している親の方が、自宅に子どもが過ごせる場所があると答えた割合は総じて高くなっています。親・子ども双方の回答から、親子で過ごす時間への満足度は住まいの環境と関連していることが分かります［図24］。

**［図24］親子時間の満足度別　自宅に子どもが過ごせる場所**

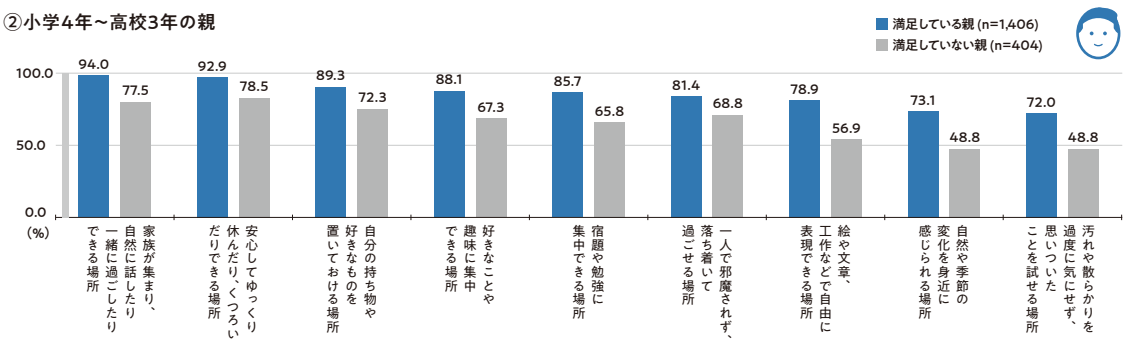
子ども:Q.今の住まいにはあなた自身が次のように過ごせる場所や環境がどの程度ありますか？　対象:小学4年～高校3年の子ども（n=2,400）（スコアは「十分にある」「ある程度ある」の合計値）
親:Q.今の住まいには子どもが次のように過ごせる場所や環境がどの程度ありますか？　対象:小学4年～高校3年の親（n=2,400）（スコアは「十分にある」「ある程度ある」の合計値）

①小学4年～高校3年の子ども




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

②小学4年～高校3年の親



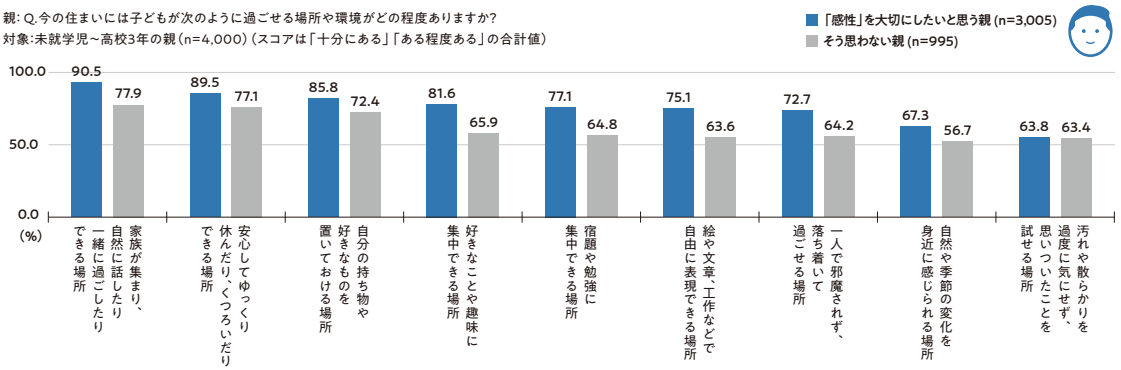

## 「感性」を大切にしたい親は、子どもが過ごせる場所が住まいにあると答える割合も高い

「感性」を子どもの成長において大切にしたい力と捉えている親と、そう捉えていない親で、住まいの環境を比較しました。「家族が集まり、自然に話したり一緒に過ごしたりできる場所」があると答えた割合は、「感性」を大切にしたい親で90.5%、大切だと思わない親で77.9%と、12.6ポイントの差が見られました。「安心してゆっくり休んだり、くつろいだりできる場所」も、それぞれ89.5%、77.1%と、12.4ポイントの差がありました。「感性」を大切にしたい親は、子どもとの会話や共有体験に加え、子どもが過ごせる場所についても「ある」（「十分にある」「ある程度ある」の合計値）と答える割合が高くなっています［図25］。

「感性」を大切にする意識と、日常の関わりや住まいの環境との間に、関連が見られました。

**［図25］「感性」の捉え方別、住まいや暮らしの環境**

親: Q.今の住まいには子どもが次のように過ごせる場所や環境がどの程度ありますか?
対象:未就学児～高校3年の親（n=4,000）（スコアは「十分にある」「ある程度ある」の合計値）




※本調査に記載の割合の数値は、小数第2位または第3位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

有識者インタビュー 京都大学 高橋雄介准教授

# 「子ども一人一人の声に耳を傾け、選び、試し、深めていける暮らしへ」

**子ども一人一人が自分の気づきや「好き」を大切にし、自分らしく生きていけるように、家庭だけでなく、社会全体で何ができるでしょうか。高橋雄介准教授から3つのヒントをいただきました。**

## ❶子どもの発見をきっかけに、親子の関心が広がる

今回の調査では、親が子どもの自主的な判断を重視するとともに、子ども自身も、自分の発見を一緒に面白がってもらったり、好きなことを応援してもらったりする関わり合いを実感していることが分かります。日々のこういった何げないカジュアルなやりとりが、子どもに肯定的に受け止められているという点に、とりわけ目を向けたいと思います。

親が「私は子どもに対して十分に関われているだろうか?」と考える際にも、子ども本人が何をうれしいと感じ、どのような時間を望んでいるのかを聞くことが、その家族に合った関わり方を考える手がかりになるのではないでしょうか。

また、親子関係は、親側だけから働きかける一方向のものではありません。例えば、子どもが虫に興味を持って話しかけたことから、親も調べたり、一緒に探したりするようになる。そんなふうに、子どもの発見や提案が、親の関心や行動を引き出すこともあります。子どもは、家庭の環境を受け取るとともに、自分の関心や反応を通じて、その環境をつくっていく存在でもあります。子どもの関心をきっかけに、親子のやり取りが広がっていくことも大切にしたいと思います。

## ❷「生成AIの答え」と「自分の答え」を比べて、何を採用し、どこを変えるかは自分で決める

「感性」を重視する親は、生成AIへの期待も不安も高い傾向が見られました。一つの解釈として、子ども自身が考えたり表現したりすることを大切にしているが故に、生成AIがその可能性を広げる面にも、機会を減らす面にも目が向いているのではないかと考えられます。

これらの結果から私が特に重視したいのは、生成AIを使う過程で、子ども自身が考え、選び、表現する機会を適切に持てているかという点です。例えば、子どもがまず自分の案を考え、生成AIに別の案を出してもらい、両者を比べながら、何を採用し、どこを変えるかを自分で決める使い方が考えられます。

出来上がった答えや作品だけでなく、そこに至るまでに子どもが何を考え、何を相談し、何を自分で決めたのかにも目を向ける――。親の生成AIに対する期待と不安を、こうした具体的な使い方について親子で考えるきっかけにしていくことが大切です。

## ❸子どもの関心を「試し、深め、時には方向転換ができる」環境づくりを社会全体で

子どもの今の「好き」を大切にしながら、新たな興味が生まれる機会も支えていくことが重要です。既に好きなことがある子にも、まだ見つかっていない子にも、試し、深め、時には関心を変えられるような機会を保障していくことが大切だと思います。こうした選択を可能にするためには、家庭の外からの支援も必要です。学校や園では、子どもが自分なりに表現できる機会を支えるとともに、一人一人と関わる時間や体制を整える。地域には、身近な自然や文化、多様な人に触れられる場を増やす役割があります。その際、参加費や開催場所、送迎の負担にも配慮し、家庭の事情による体験格差や機会格差を小さくしていくことが重要です。

企業には、親子で過ごす時間を確保しやすい勤務時間や、休暇を取りやすい職場環境を整える役割があります。住まいについても、家族と一緒に過ごす、一人で落ち着く、思いついたことを試すといった過ごし方を、子どもの希望に応じて調整できることが大切です。

子ども一人一人の声に丁寧に耳を傾けることと、その思いを実現できる機会を用意すること。その両方が大切です。一人一人の違いを尊重し、家庭の事情による機会の差を小さくしながら、子どもが「やってみたい」と思ったことを選び、試し、深めていけるように、家庭・学校・地域・企業がそれぞれの立場から支えていくことが必要です。



京都大学大学院教育学研究科 **高橋雄介**准教授

2008年、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。
京都大学高等教育研究開発推進センター特定助教、京都大学白眉センター特定准教授などを経て、2020年より現職。
専門は教育心理学・発達心理学・行動遺伝学。

親子で今日からできる!

# 子どもの感性をはぐくむための3つのアクション

アクション 1

## 「昨日と違う」を探す

帰り道やいつもの景色について
「昨日とどこが違う?」と問いかけ、
一緒に探してみましょう。
大人も感じたことを
伝えてみるのが大切です。

アクション 2

## 生成AIと自分の答えを比べる

まず自分の考えを出し、
AIの案と比べてみましょう。
「どこが違う?」「本当にそうかな?」と
親子で考え、何を取り入れるかを
子どもが決めることが大切です。

アクション 3

## 子どもが決める場面をつくる

献立の一部や工作の進め方などを、
子どもに任せてみましょう。
必要な手助けをしながら、
うまくいかなければ
一緒に考えることが大切です。

# 積水ハウスの「キッズ・ファースト」について

## 基本的な考え方

積水ハウスグループは、住宅は重要な社会資本であると考えています。社会資本であるからこそ、長期にわたり住み継がれていく良質な住宅を残すことが私たちの使命であり、そこに住まう人々の幸せを実現することも、私たちが担う役割だと認識しています。一方で、日本の子どもたちの精神的幸福度は先進国の中でも特に低いと言われています。未来を生きる子どもたちにとっての影響が大きいこの課題を軸に、当社グループが果たすべきアプローチとして、「感性を重視したキッズ・ファースト」を位置づけました。

子どもたちが感性豊かに幸せに育てば、近い将来、発想豊かな大人になり、日本の社会にイノベーションを起こしてくれるだろうという考えのもと、事業を通じた「子どもたちへの感性アップ支援」、活動を通じた「子どもたちへの住育」、社会貢献を通じた「積水ハウス　マッチングプログラム（従業員と会社の共同寄付制度）」などに重点を置き、子どもたちの幸せづくりの一助となる施策に取り組んでいます。今回の調査もこの取り組みの一環として行いました。

## 子どもを取り巻く環境　調査背景

OECD「PISA2025」における日本のスコアは、学習の習熟度が高い生徒の割合が約72.9%と高い一方、学習への関与度が高い生徒の割合は15.8%にとどまりました※1。また、文部科学省中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」では、「自身の思いや願い・意志を実現し、自身の人生を主体的に舵取りしていく力に課題が見られる」と指摘され、「一人ひとりの『好き』を育み、『得意』を伸ばすことが、これからの教育の方向性の一つ」とされています※2。

一方、生成AIをはじめとするテクノロジーの台頭が子どもを取り巻く環境に与える影響も無視できません。ユニセフ「AIと子どもに関するガイダンス」（2025年）では、「AIへの『任せすぎ』で、自分で考え、成長する機会が減る」との懸念を示しています※3。こうした動向は、子ども一人ひとりの「好き」や主体性・創造性を育む教育の重要性の高まりをうかがわせます。

※1 文部科学省「OECD生徒の学習到達度調査（PISA2025）のポイント」より
※2 文部科学省次期学習指導要領等に向けた審議まとめ（1／4）2026年10月5日、本文p.4・15
※3 UNICEF-Innocenti-Guidance-on-AI-and-Children-3-2025.pdf

## 子どもたちへの感性アップ支援

当社では、長年の住生活研究開発のノウハウをもとに、「積水ハウスのキッズでざいん コドモイドコロ」として、子どもの生きる力を育む「居どころ」づくりと、安全・安心と自主性を考えた「子どものためのスマートユニバーサルデザイン」を提案しています。この提案では、子どもたちが自ら育とうとする「子育ち」に着目しています。「子育ち」の視点で、重要になってくるのが「感性」「身体」「知性」「社会性」の4つの力で、これらの力は子ども時代に著しく発達をとげ、生涯を通じて重要な「生きる力」になります。その1つである「感性」は、「五感（体感力）」やその感覚に伴う感情「好奇心」「情緒力」「表現力」などです。重要発達期が乳児期から幼児期前期にあり、ごく幼い時期から体験を通して身につく力です。もちろん、重要発達期以外の各段階でも発達します。

当社の考える「子どもたちへの感性アップ支援」は、子ども視点のものづくり・まちづくり、すなわち、子どもたちの「感性」「身体」「知性」「社会性」をよりよく伸ばすための大切な住まい・まちを提供するため、感性の発達を促す提案を強化し、キッズでざいんを拡充することと考えています。

詳しくはこちらをご覧ください。

https://www.sekisuihouse.co.jp/company/sustainable/social/activity8/


KIDS
FIRST